

わたしはえんぴつ

奄美市立小宿小学校

一年　ながた　あやね

わたしは、さんかくのぴんくいろのえんぴつ。じのれんしゅうをするためにうまれてきたの。わたしは、やさしくて、ていねいにいっししようけんめいじをかくてくれるひとにかつてほしいなとおもいながら、ぶんぼうぐやさんでまっていたの。

そうしたら、おおきなおおきなこわそうなおとこのひとが、わたしをれじにはこんだの。

「えっ、こわいよう。だれかたすけて。」とおもったけれど、わたしはえんぴつ。おみせのひとにふくろにいれられて、おとこのひとにつれていかれたの。

ケケケケケ、カエルのなきごえ。ザーツ、とおくからうみのおと。ここが、わたしのあたらしいいばしよ、おうちみたいだ。わたしはふくろからだされた。わたしをとりだしたては、こどものあたたかいてだった。「うわあかわい。はやくつかいたい。ぱぱ、ありがとう。」

というおんなのこのこえがした。わたしは、このひから、あやねちゃんのこうひつのれんしゅうをするえん

ぴつになった。

あやねちゃんは、まいにちいっししようけんめいこうひつのれんしゅうをしていた。キョロロロ、アカシヨウビンのなくあさも、ほしがふつてきそうなよるも、ときどきままにおこられながら、いっししようけんめいわたしをつかってくれた。わたしのからだは、どんなちいさくなくなってきた。わたしは、いっばいつかつてもらえてうれしかった。わたしのからだにてのあせをつけて、あつくなるくらいにぎりしめてがんばるあやねちゃん。わたしもあやねちゃんのじがじょうずになるようにがんばった。

ゴーツ。ガジュマルのきをゆすりながら、あめがじめんをたたきつけるおとがする。とつぜん、わたしは、つくえのひきだしに、ほうりこまれた。わたしがみじかくなつたから、つかいにくくなってほうりこまれたのだ。わたしはかなしかった。いたかった。もうわたしは、あやねちゃんに「いらない」といわれたのとおんなじなのだ。からだもいたかった。ころもいたかった。くらいなかでうずくまっていた。かなしかった。どしやぶりのあめのおとだけがきこえてきた。

なんにちかたつたあるひ、ふわり、やさしいひかりにつつまれた。あやねちゃんがみえた。あやねちゃんがわたしになにかをかぶせた。それは、きいろのかわ

いいキャップだった。わたしのしんちようは、ぐんとのびた。はじめてつかってくれたときよりもつよく、あやねちゃんに、にぎりしめてくれた。またいっしょにがんばれる。わたしにもちからがわいてきた。

きみどりのくるくるまいていたそてつのはっぱも、こいみどりになり、ぴんとちからづよくひらいている。いまでは、わたしのしんちようは、あやねちゃんのでのひらにすっぽりはいるくらい小さくなった。もうすぐわたしは、キャップをしてもつかえなくなる。でも、わたしは、ありがとうというきもちでいっぱい。わたしのからだはなくなっても、わたしは、あやねちゃんのじのなかでいきている。だっていっしょにがんばったんだもん。さいごまでたいせつにつかってくれて、ありがとう。

きょうも、やまのみどりが、キラキラかやいている。

